



No.45 / Spring 2021

会 長 滝浦 真人

事務局 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 人文社会科学系 日本語教育講座 北野浩章 研究室

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名: 日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号: 00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号: 099 (店名: 〇九九) 当座預金 口座番号: 0130378 日本語用論学会

《副会長メッセージ》

日本語用論学会副会長

小山哲春 (京都ノートルダム女子大学)

2020 年度の日本語用論学会年次大会はオンラインでの開催となりました。大会運営に関わってくださった多くの先生方のお陰で、無事かつ盛況のうちに年次大会を終えることができたのは喜びの極みではありますが、本稿を執筆している時点でも複数の都道府県に緊急事態宣言が発出されており、2021 年度の年次大会、各種研究会の開催形態についても予断を許さない状況が続いています。ニューズレターの巻頭言執筆を依頼され、本来であれば学会のこと、語用論のことについて皆様へのメッセージを認めるべきところではありますが、今回は、会員の多くの皆様が、教員として、あるいは学生として関わっている大学での教育について、コロナ禍でこれを見つめ直す機会を頂ければと思います。研究者・教員という立場を離れてむしろ大学生の娘を持つ一人の親として、大学の教育に希望を持つ一人の市民として一言触れさせていただくことをお許しください。

大学教育関係者の間で、教育のオンライン化について、コロナ禍での学生の学びや教員の役割について、そして何よりも特に人文系・教養系の学問の (大学教育としてだけでなく、一般的な) 存在意義について、様々な立場から意見が交わされています。様々な専門性やカリキュラム・ポ

リシーがある中で十把一絡げに論じるのは不可能ですが、多くの大学では、「学びを止めない」というスローガンの下、対面がかなわない場合はオンラインで、技術や環境が許せばライブやインタラクティブに、そうでない場合はオンデマンドや課題型、といったやり方で、対面教育のあらゆる代替手段を駆使してこれまでと遜色ない教育を維持しようと努力を続けています。学生だけでなく保護者や後援会の心配や懸念を解消すべく、コロナ禍での (代替) 教育の説明や、留学や実習の代わりとなる取り組みの構築に奔走されている先生方も少なくないと思います。

いずれも大切な行為ですが、その一方で、しかし・・・、という違和感や懸念を覚えておられる皆様も多いのではないのでしょうか。もしかすると私たちは、「授業とは教室内でしか成立しない」、「教育とは定められた固定カリキュラムの中で画一的にしか達成されない」、という固定観念に縛られて現状維持を続けてきたのではないのか。深い自戒を込めて振り返れば、対面授業ができないので代わりに自身の講義を録画してオンデマンドで配信する、という行為は、そもそもこれまでの自身の対面授業に内在していたはずの種々の問題点に蓋をし続ける行為に他ならないのでは・・・。その解釈は皆様にお任せしようと思いますが、この間、小さな研究会での先生方のご発表や同僚との会話の中で耳にした種々の議論や言説に勇気を得る場面が多くありました。私ごとき者がそのような議論に立ち入るのは僭越と知りながら、これにまでに感じてきた漠然

とした違和感と懸念を、敢えて言葉にしてみましたと思います。

コロナ禍の大学教育に求められているのは、「学びを止めない」といったスローガンの姿勢ではなく、学生および教員が、それほど直接的に経済活動に参加しない、逆に言えば、経済活動の抑制によって幸いにもそれほど大きな被害を被らない大学関係者として、(思い切って乱暴に言えば)表面的な学びを止めてでも「思考を止めない」努力を重ねることではないのでしょうか。自分自身の大学時代の不勉強は棚に上げて・・・大学(生)の本分は、知性の涵養、その一点に尽きるはずです。コロナ禍の行動様式、社会、そしてこれからの教育に関して、文科省のディスコース、大学のディスコース、教育者のディスコース、研究者のディスコース、学生のディスコース、それ以外にも政治家のディスコースや科学者のディスコース、メディアのディスコースといったものが、相互に構造的または権力的な影響を授受しながらそれぞれの社会現実を構築しています。その結果として政治が混乱し、医療体制が脅かされ、経済が停滞し、特に社会的弱者が感染や重症化の危険に晒されていると言って良い状況にあって、一人一人の教員、一人一人の学生ができるのは、こうした環境での適切な行動や思考を「知的」に生産すること、それぞれのディスコースによって構築される偏った世界の縛りを受けずに「知性」を育むことができる環境を提供し、これを享受することではないでしょうか。その具体的方法は様々であり、また正しい知性の姿を論じるだけの教養を私自身は有しませんが、「専門性の教育を犠牲にして人道教育を行うべき」とか、「やはり社会に直接貢献する技術・スキル教育は継続しておくべき」といった目先の努力ではなく、特に人文系・教養系、そしてもちろんそれ以外の学問領域においても、まさにそれぞれの専門性を突き詰める過程を通してこそ、こうした未曾有の状況に対応すべき知性とその結果としての行動を培うことができると期待したい、いや、信じたいと思っています。

オンライン授業における「対面性」の欠如は、まさにその欠如感ゆえに、あらためての知への欲求を産み出し、大学教育の正しい動機について私たちに再考を迫ってくれているとも言えます。このコロナ禍が収束に向かう時、わたしたちは、ああ、また対面授業に戻れる、これまで作ってきたシラバスや講義資料がまた使える、といった思考停止に陥らず、教育における構造的な問題や批判的思考涵養環境の欠如について、これまで以上に対峙する必要があるのかもしれない。

まとまりも具体性もない文章となってしまうましたが、私自身の能力でできることは少ないと悲観しながらも、同僚、学生、そして学会の皆様と語り合い、ことばの社会構成的機能を批判的に実践していきながら新しいディスコースを蓄積していきたい、と強く感じています。そして、語用論学会が、直接または間接的にそのような役割を担う学会として成長していくことを願ってやみません。(小山哲春)

《特集 語用論研究の新潮流》

語用論研究の新潮流 (4)

深田智 (京都工芸繊維大学)

「やさしく叩く」とはどういうことだろうか—筆者が「ことば・うごき」研究を始めたきっかけの1つはこの疑問にあった。「叩く」という動詞は、一見すると、やさしさとは無関係な、時に、やさしさとは相容れないことばであるように思われる。しかし筆者は、当時まだ幼かった息子に肩叩きをお願いする際、よく「やさしく叩いてね」と言っていた。そして息子も、それに合わせて叩く力を変え、ちょうどよい具合に肩を叩いてくれた。同じ頃、息子は大好きなお友だちの手を握る際、よく「ぎゅうっ」と「掴んで」しまい、お友だちに「痛い! 痛い!」と言われていた。その時にも筆者は、「やさしく、だよ」と伝えていた。

理解でき実行できた「やさしく叩いて」ということばと、理解できていたかもしれないがうまく実行できなかった「やさしく握る」との間にはどのような違いがあったのだろうか。また、そもそも「やさしい」とは人の性格や態度を表すことばであると思うが、叩き方や握り方が「やさしい」とはどういうことなのだろうか。これらを解明するには、おそらく、「やさしく」「叩く」「握る」といったことばの理解だけでなく、それを行動に移すこと(行為の実践)にも注目する必要がある。そして、このことばの理解とうごきによる実践は、間違いなく、子どもの発達や他者とのインタラクションと深く関わっている。そう考えて始めたのがことば・うごき研究である。加えてほぼ同時期に、「認知的インタラクションデザイン学」という新学術領域の研究に参画することになり、保育園児たちを対象に行われた身体運動セッションの経年データを「インタラクション」という観点から言語学者として分析する機

会を得たことも、このことば・うごき研究をスタートさせるきっかけとなった。

研究当初は、スポーツ科学の専門家と実験心理学の専門家に加わってもらい（この二人は現在も筆者のよき議論相手となっている）、運動解析の方法を聞きながら、どんな実験を組んでいけばよいかを検討した。子どもたちを調査対象とするには、発達に関する多様な知識とともに、子どもたちから「自然な」ことば・うごきを引き出すための工夫が必要になる。そこで、まずは成人を対象とした実験をすることになった。将来的に子どものデータとも比較できるよう、幼児でも実行可能な、それでいて計測しやすいうごきとして「ジャンプ動作」に着目し、指示のことば（「高くジャンプ」「天井に触れるようにジャンプ」「ピョーンとジャンプ」など、文字情報として提示）に沿って垂直方向に一度ジャンプしてもらう、という実験を行った。それぞれの指示のことばが具体的にどのようなジャンプ動作を引き出すのか、そこに傾向はあるのか、を調査する探索的な研究であった。

ジャンプ動作実験で計測したのは、跳躍高、肩関節角度、膝関節屈曲角度である。得られた実験結果の中で言語学的な観点から特に興味深かったのは、一般に運動学習に効果的だと言われているオノマトペが、必ずしも一定のうごきを生むわけではなかった、という点である。これは、それぞれの人がそれぞれのイメージでオノマトペを理解している可能性があることを示唆している。オノマトペが運動学習に効果的に働く場合とは、運動学習者自身が内省の中で習得すべき運動を自分なりにオノマトペで表現する場合、もしくは、運動指導者がこの解釈の多様性をなくすためにうごきとの共起の中でオノマトペを用いる場合、と考えられる。

他方、オノマトペとは対照的に、比較的安定したうごきを生んだ指示のことばもあった。それは、天井や床といった外部環境に注目した指示のことばである。外部環境を言語化することで、運動実施者は、その環境に合わせて自分のうごきを調整することができ、また、運動指導者は、運動実施者とともに、この実践されたうごきを外部環境との関連で客観的に評価することができる。天井や床は、ジャンプ動作の実践という目的における両者の「共通基盤」(common ground)の一部となっていた、というわけである。冒頭で述べた〈やさしく叩く〉と〈やさしく握る〉の行為の実現における違いの一因は、行為の評価基準が外部環境ではなくインタラクション相手、しかも、年齢も体格も、そして、それまでに行う実践者である息子と積み重ねてきた「やさし

く○○する」に関する共通基盤も異なる相手であったということにある、と思われる。

ことば・うごき研究には、その後、発達科学の専門家や幼児教育の専門家も加わり、子どもを対象とした調査も続けている。筆者自身は、指導者の指示のことばとそれに対する子どもたちのことばやうごき、子ども同士のことばやうごきを介したやりとりを分析しつつ、指示のことばと叙述のことばの異同等も言語学的な観点から検討している。採取した個々のデータを、ことばとうごきの観点から詳述していく事例研究ではあるが、それを通して人同士のインタラクションや子どもの社会化 (socialization) について考える中で、あらためてことばの存在意義を問い直すに至っている。また最近では、身体接触にも注目し、ことばやからだを介した他者への信頼感の形成や、間身体性・相互主体性についてもあれこれと考えを巡らせている。ことば・うごき研究は、語用論、認知言語学といったことばの研究からスタートした筆者の研究の中で、すでにしっかりとした「新たな流れ」となっている。

(深田智)

* * PSJ24 (第 24 回大会) ご案内 * *

2021 年度日本語用論学会第 24 回大会は、以下のとおり、東北大学（宮城県仙台市）での開催となります（事情により会場に来られない発表者のリモート発表は認める予定です）。ただし、社会状況を考慮して、全面オンライン開催に変更する可能性もあります。

会員の皆様からの発表ご応募・ご参加をお待ちしております。なお、未確定部分につきましては、確定次第、順次 HP で更新していきますので、ご確認ください。

◆日時：12 月 18 日(土)、19 日(日)

◆場所：東北大学川内北キャンパス

(アクセスについては P.5-6 をご参照ください。)

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

★開催方法変更時の案内

事情により全面オンライン開催に変更する場合は、学会公式ホームページと会員メーリングリストで告知します。

◆主なプログラム

時間帯などの詳細は追って発表しますが、大まかなプログラムは以下の通りです。

《12 月 18 日 (土)》

☆口頭発表①

☆ワークショップ

☆ポスター発表

☆会員総会

☆講演

☆懇親会

《12月19日（日）》

☆口頭発表②

☆シンポジウム

◆講演（12月18日）

講師：三木那由他先生（大阪大学大学院講師）

テーマ：検討中

◆シンポジウム企画（12月19日）

1. テーマ 語用論的方言学への招待

2. 趣旨 日本語は語用論的に見た場合、決して一枚岩ではなく、多様性に満ちている。そうした多様性のひとつが地理的変異である。近年、日本語方言は構造的な面だけでなく、その運用面においても地域差の存在が明らかにされつつある。語用論的な視点に立つとき、日本語にはどのような地域差が浮かび上がるのだろうか。ここではそうした興味に根差す研究を「語用論的方言学」と名付け、その世界を紹介していく。「方言学」と「語用論」とは、これまでかならずしも交流が活発でなかったが、このシンポジウムを機に、両者の交流から新たな研究が生み出されることを目指す。

3. 司会・登壇者・発表内容（話題）

司会：小林隆（東北大学）

発表1 語用論的方言学の構想

小林隆（東北大学）

発表2 言語行動の方言学

中西太郎（跡見学園女子大学）

発表3 バライトネスの方言学

津田智史（宮城教育大学）

発表4 語用論的方言学の資料

椎名渉子（名古屋市立大学）

コメント 一般語用論の視点から

ディスカッサント：滝浦真人（放送大学）

◆発表募集

発表言語は日本語と英語のいずれかです。発表形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの3種類です。みなさま、ぜひ奮って応募いただきますようお願いいたします。以下に日程と応募要項を示します。

◆発表関連日程

- 発表応募締め切り：2021年8月31日(火)
- 採否通知：2021年10月上旬
- 大会発表要旨(Abstract)原稿締切：2021年10月下旬
- 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切：2022年3月31日(木)

◆応募要項

①申し込み資格

口頭発表・ポスター発表の第一発表者、ワークショップの代表者として発表を申し込むには会員である必要があります。なお、ワークショップは司会者を含めて3名以上の団体である必要があります。

②発表形態と発表時間

1) 口頭発表：発表25分＋質疑応答10分

2) ポスター発表：1時間（掲示時間）

3) ワークショップ：1時間40分

※1. 海外に在住していて入国できない、基礎疾患などを抱えていて外出を制限しているなどの事情により現地に来られない方は、採択時に申告していただき、正当な理由と認められれば、オンラインでの発表を認めることとします。

※2. 社会状況を考慮して、全面オンライン開催となる可能性があります。その場合、発表方法が変更となりますので、予めご承知おください。

③発表言語：日本語または英語

④申し込み先

発表の申し込み先は、学会ホームページの会員専用ページ「マイページ」内です。大会発表応募ページは7月下旬にオープン予定です。投稿方法の詳細は後日学会ホームページ上で案内します。

⑤申し込み原稿の形式

発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ形式です。

用紙サイズ：A4 縦

規定文字数：日本語 2,500 字以内、英語 500 words 以内。日本語の場合は文字数を、英語の場合は word 数を、原稿の末尾に記入してください。

ファイル形式：Microsoft Word 形式 (doc, docx)、PDF 形式(pdf)

- ・ 氏名と所属は記入しないでください。
- ・ 発表タイトルを1行目に、タイトルの後を1行空け、次の行から本文を記入してください。

- ・ ワークショップの場合は、発表者全員分の要旨が規定文字数に収まるようにまとめてください。
- ・ 文字数と word 数には、例文、表、キャプション、注釈を全て含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や参考文献は含みません。日本語原稿の中にアルファベット等の半角文字を含む場合、半角文字 2 文字を 1 字と数えます。
- ・ 参考文献の書式は『語用論研究』に準じます。
- ・ 指示された形式やファイルフォーマットに従わずに申し込んだ場合、内容にかかわらず不採用となることがあります。

⑥申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。かつ、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

- ・ 問題となる現象
- ・ その現象についての先行研究と問題点
- ・ 現象の分析に用いるデータ
- ・ 現象の分析方法
- ・ 現象の分析結果
- ・ 分析結果に基づく結論と理論的含意

⑦申し込み制限

一人の会員が発表者として申し込みできるのは、一大会につき 2 件（ワークショップ含む）までです。かつ、第一発表者、または、ワークショップの代表者として申し込みができるのは一大会につき 1 件のみです。

⑧二重投稿の禁止

申し込みにおいては、二重投稿を禁止します。大会発表委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みは受理されません。かつ、次年度の大会においても当該者を発表者に含む申し込みは受理しません。

※1. 二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表を申し込み中である内容、または、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込むことを指します。

※2. 学士論文・修士論文・博士論文は、公表や出版がされていない場合、「学術的刊行物」には含めません。

※3. 学会の発表や学術的刊行物の掲載へ応募したものであっても、既に不採択が決定している内容を申し込む場合は、二重投稿に含まれません。

⑨選考結果の通知

選考結果は 10 月上旬に第一発表者、または、ワークショップの代表者宛に通知します。

⑩No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ホームページにて公表します。ただし、事前、または、当日に（やむをえない場合には事後に）、発表を行えない（行えなかった）合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆問い合わせ先

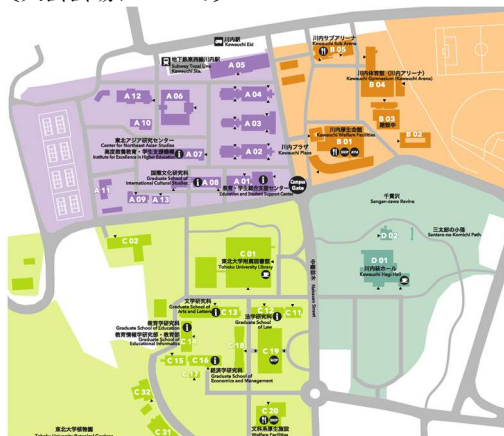
E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp

(大会発表委員長・金丸宛)

発表申し込みに関するお問い合わせは、上記アドレス宛に 8 月 20 日(金)までにお願いします。

◆第 24 回大会会場・東北大学への交通・宿泊について

[大会会場について]

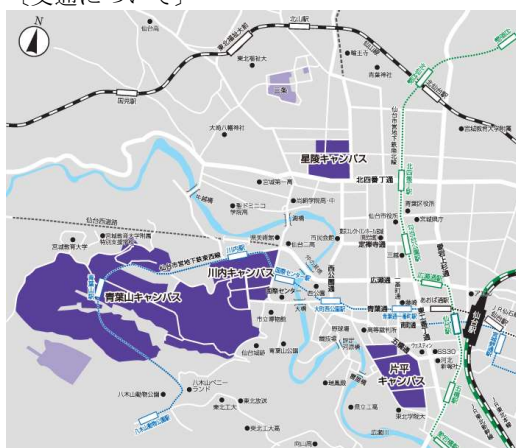


会場：〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 東北大学川内北キャンパス 地図内の A のエリア

最寄駅 所要時間

仙台市地下鉄東西線川内駅（キャンパス直結）
<https://www.tohoku.ac.jp/map/ja/>
東北大学インタラクティブマップでは、施設名やカテゴリでの検索、スマートフォンによる位置情報の取得が可能です。ぜひご利用ください。

〔交通について〕



★東北大学川内北キャンパスは、JR 仙台駅から地下鉄東西線、八木山動物公園行きに乗り、川内駅下車（所要時間7分）、駅出口直結のところにあります。仙台駅は東京駅から新幹線で95分です。

〔宿泊について〕

仙台市中心街、仙台駅周辺の宿泊が便利です。仙台市中心街（仙台駅周辺から中央通り、一番町）は仙台駅と川内キャンパスの間に位置しています。仙台市内にはビジネスホテル、観光ホテル等多数ありますが、他の学会や観光、催し物等で満室になることがあるため、宿泊のご予約は各自にてお早めをお願いします。

◆第23回大会、大会発表賞受賞者発表

受賞者：金沢じゅん（東京大学大学院）

大会発表タイトル：

「英語の一人称・二人称代名詞の語用論的機能」
授賞理由：本発表は英語の一人称代名詞と二人称代名詞の使い分けを論じたもので、両者の使い分けは話し手が聞き手との心理的位置関係をコントロールするための手段とし、三上章の概念を援用した説明を試みた点がユニークです。話し手と聞き手の対峙的位置関係と並列的位置関係について図を工夫するなど、オンライン発表において資料を大変見やすく提示した点と誠実な質疑の態度が高く評価され、大会発表賞を受ける主な理由となりました。今後の自らの改善の方向性を客観的、かつ明瞭に回答しており、他の発表に比して対応力のレベルが高い発表になっていた点も評価されました。

表彰ならびに記念品贈呈：第24回大会期間中に開催される会員総会の席上、表彰が行われます。

** 研究会コーナー **

◆関東地区研究会

関東地区研究会では、椎名美智先生（法政大学）を講師にお迎えして、「カルペパーとホーの『新しい語用論の世界—英語からのアプローチ』：この本は、どこがどう新しいのか？」と題した講演会を2020年12月20日（日）に開催しました。当日は、聞き手として参加して下さった共訳者の滝浦真人先生（放送大学）からも適宜補足を頂きましたので、まだ同書を読んでいない方々にも有益な勉強の場になったことと思います。また、編集にあたった津田正さん（研究社）もゲスト参加して下さり、翻訳の舞台裏についても大変興味深いお話を伺うことができました。椎名先生と滝浦先生の絶妙なトークは、さながら夫婦漫才のように緻密に組み立てられており、さらには津田さんも加わった3人のトークは、オンラインで参加していた70数名の耳を捕らえて放さず、あっという間に予定されていた2時間が過ぎてしまいました。本講演会の準備に割いて下さった時間と労力の大きさに、改めて感謝せずにはいられません。

なお、今年度の関東地区研究会は、まだ実施内容が決まっておりません。決まりましたら、学会MLにて会員の皆さまにお知らせ致します。（尾谷昌則）

◆中部地区研究会

中部地区研究会では、2021年3月5日（金）に名古屋大学大学院人文学研究科との共催で、田中廣明先生（京都工芸繊維大学名誉教授）の講演会を開催しました。オンライン開催で地区の限定のない講演会になったため、多数の参加者がありました。

タイトルは、「話し手の意味と聞き手の理解—協同発話からの考察—」です。「意図」を基盤にした従来の意味論ではなく、「共同性」を基盤にした意味論を主張し、日本語や英語からの協同的な発話の例(co-construction, expansion など)が豊富に引用されました。実例を重視する社会談話的アプローチによって、「共同性」の内実を解明しようとするもので、多くの示唆に富む刺激的なご発表でした。（北野浩章）

◆中四国九州地区研究会

コロナ渦で大学での仕事が増え、研究になかなか力が入れない状況が続く中、着実に研究を進めているメンバー間で各自の近況を情報交換しています。今年度は部分的に対面に戻る

ので、少し緊張した新年度です。以下、順不同でご紹介します。

2020 年度、九州大学の大学院の授業は、全て遠隔体制で実施されました。不便なことも多くありましたが、ZOOM のおかげで、海外在住の留学生、他県在住の卒業生、実家に帰省中の学生など、様々な場所をつないで授業やゼミを実施できました。学生たちも、例年になく全国規模の学会や研究会にオンライン参加できたようです。私はこの春、九州大学から京都大学に転出したのですが、遠隔体制のおかげで、2021 年度も九州大学で大学院授業を週 1 コマの非常勤として担当させていただく予定です。(横森大輔)

科学研究費課題である対人機能の発達の一環として、譲歩文からトピックシフトという機能が拡張し、それに伴い、譲歩を表す接続表現がトピックシフトをマークする談話標識的な意味機能を拡張させる事例について、Sweetser (1990) の 3 領域説を援用し、その拡張は、トピックシフト用法が発話行為譲歩文の一種であることに動機づけられていることを論じた論文を執筆し、近く刊行されます。(大橋浩)

ロシア人のナジェージュダ・ウェインベルクさん(イルクーツク国立大学准教授) およびロシア語の専門家の東出朋さん(長崎国際大学)、井上幸義先生(上智大学名誉教授)とともに、対照研究をしています。日本語とロシア語の(イン)ポライトネスの類似点・相違点はどこにあるか、その根本にある社会文化的要因は何か、またどのようにこの類似点・相違点を指導したら良いか、これらの疑問に答えることで日露の相互理解を深めることが本研究の中心的課題です。(松村瑞子)

『データから眺めることばとコミュニケーション』(ひつじ書房)を夏頃に出版する準備を進めています。九州大学大学院の日本語、英語、中国語、スペイン語の 12 名の研究者を執筆者とした、言語コーパスやマルチモーダルコーパスなどの様々な言語・非言語データに基づく語用論研究の論文集です。使用する言語・非言語データに関する情報にも触れ、データに基づく語用論研究の方法論を提示しています。(大津隆広)

2020 年度は大規模なコーパスを利用し、動詞を中心とした構文の抽出を試み、抽出された構文に対して始点と終点、抽象化されるスロットの位置等について検討しました。また、SNS 上のコミュニケーションで使用される表現やその拡張用法について、その語用論的な機能について分析と考察をおこなっています。(土屋智行)

6 月に明石書店より刊行予定の『リスクコミュニケーション』に所収される 1 章をコロナ報道の

言説分析に関して執筆しました。従来の言語学は語用論を含め、言語の形式の分析で、形態素、構成素、単語の分布などに主な関心があります。これらの言語分析の成果を基に、言語で表された内容、時代や世代に特有の価値観、偏見、判断基準などの言説分析に進みたいです。コロナとともに生きる時代のことばの使い方を模索しています。(西田光一)

◆メタファー研究会

昨年 3 月に予定されていた日本語用論学会メタファー研究会の「世界のメタファーズー普遍性と言語相対性―」が、2021 年 3 月 16 日(火)・17 日(水)にオンライン・ミーティングとして開催され、活気ある議論が繰り広げられました。ご参加くださったみなさま、ありがとうございました。プログラムは以下の通りでした。

2021 年 3 月 16 日(火)

司会：鍋島弘治朗(関西大学)

13:00-13:55 導入・「英語・日本語のメタファー」

鍋島弘治朗(関西大学)

13:55-14:40 「中国語のメタファー」 Ning Yu(ペンシルバニア州立大学)・Lihong Huang(ジョージタウン大学)・劉俊蘭(関西大学[院])

司会：杉本巧(広島国際大学)

15:00-15:40 「ヨーロッパ諸語 懸垂メタファー」 平塚徹(京都産業大学)

15:40-16:30 ディスカッション 司会：杉本巧(広島国際大学)

2021 年 3 月 17 日(水)

司会：杉本巧(広島国際大学)

10:00-10:40 「韓国語のメタファー」 吉本一(東海大学)

10:40-11:20 「フィジー語のメタファー」 浅井優一・篠原和子(東京農工大学)

11:20-12:00 「アમેレ語のメタファー」 野瀬昌彦(滋賀大学)

司会：大田垣仁(近畿大学)

13:00-13:40 「フランス語のメタファー」 治山純子(東京大学非常勤)

13:40-14:20 「セルビア語のメタファー」 岡野要(神戸市外国語大学)

司会：石井康毅(成城大学)

14:30-15:10 「ラトビア語のメタファー」 堀口大樹(京都大学)

15:10-15:50 「ポーランド語のメタファー」 ジェブカ・ラファウ(北海道大学)・バビエノ・マテウシュ(北海道大学[院])

16:10-17:30 全体総括 司会 楠見孝(京都大学)
(鍋島弘治朗)

** 委員会・事務局より **

★『語用論研究』編集委員会より

S/P22 はいかがでしたでしょうか。今号は、関係の皆さまのご協力の下、どの論考も、自由闊達な議論を進めています。ご批判、ご議論の一助になりましたら、編集委員一同幸甚に耐えません。22号は、一般投稿論文5本（投稿数25本、採択率20%）、特別講演論文(Istvan Kecskes 先生)、書評2本で、128ページとなりました。

先般、会員メイリングリスト、学会サイトでもお伝えしましたように、次号『語用論研究(S/P)23』(2021)の、一般投稿論文の投稿締め切り、並びに注意事項を以下のようにしました。よくお読みの上、投稿をお待ちしております。

1. 投稿期限：2021年5月31日（月）23:59 JST
2. 剽窃、二重投稿、不適切な自己引用、サラム論文などは禁止しますので、ご注意ください。
なお、学会サイトの語用論研究スタイルシートをよくお読みの上、ご投稿ください。
3. 特に、特集論文などの募集は行いません。語用論のどの分野でも結構です。ただし、語用論に関する、独自性、新規性の高い論文を募集しております。

投稿にあたっての注意事項

- a. 『語用論研究(S/P)23』(2021)の投稿は、ウェブシステムの投稿ページから行ってください。
<https://www.pragmatics.gr.jp/>

上記、学会サイトの個人用ページから入ってください。投稿するためには、2021年度の会費納入が必要となります。ただし、現在までの連続して会員である期間において、当年度を含め会費未納の年度がないことが必要です。（未納の年度を飛ばして今年度会費を先に納めることはできません。）過去に会費未納がある場合は、合わせてお払いくださいますようお願いいたします。（一度退会して再入会した場合の、会員でなかった期間については問いません。）

- b. 投稿期限は、2021年5月31日（月）とします。正確には23時59分JSTです。
- c. 「原稿ファイル」及び「個人情報ファイル」（投稿ページに記入するようになっております）を提出してください。
- d. ファイル類を送付した後、2週間経っても、原稿が到着した旨の確認返信メールがない場合は、事務局宛にご連絡ください。

締め切り後、昨年度と同じ査読スケジュールに沿って、査読に入り、9月には投稿者の皆様に第1次の査読結果をお伝えできるよう作業を進めます。編集委員一同、外部査読の先生方とともに、

1つでもいい論文を掲載できるよう議論を進めて参りますので、しばらくお待ちください。

次号の募集では、学会誌を取り巻く昨今の状況により、次号は、「剽窃、二重投稿、不適切な自己引用、サラム論文などは禁止しますので、ご注意ください。」という文言を付け、投稿の皆様に注意を呼びかけました。本学会誌で、特にそういう事例が増えているというわけではないのですが、時代の流れに沿った文言を明確にし、今後、学会誌の投稿規定・スタイルシートにも、詳細を付け加える予定です。

さて、それに関し、本学会誌では、3年前より、前編集委員長滝浦先生（現会長）の提言の下、投稿者の皆様に寄り添った査読をというスローガンを標榜し、詳しい査読、投稿者へのアドバイスなど、従来にも増した方策をとるようにしてきました。詳しくは、S/P19から22の最終ページにある「S/P 査読方針について」をお読みください。

さらに、現編集委員長を務めております田中からは、昨年来、Newsletter や「編集後記」で、「作り手の切なる願いとしましては、お読みいただく以外にない」という趣旨のことを申し上げました。皆様で、読書会を開いていただき、ああでもない、こうでもない、と、会員による、いわば査読を行っていただくというのもひとつのやり方かと思えます。

この「お読みください」という願いに関しまして、最近またま目にしました脳科学者・言語学者である酒井邦嘉氏の講演が印象に残りました。氏は、2015年の第122回東京大学公開講座「心」：「脳から見る人間の言語と心」(Youtube 配信)で、ベートーヴェンが荘厳ミサ曲「ミサ・ソレムニス」に記した自筆譜冒頭への自身での書き込みを取り上げ、次のように解説しています。
"Von Herzen -- Möge es Wieder -- Zu Herzen gehen"
(心から出で、願わくば再び、心へと至らんことを)

「前半の『心から出で』の部分は、作曲者の『心』について述べており、音楽という『再現芸術』を述べていると捉えられる。楽譜という圧縮された情報から、演奏者が心を再構築（解凍）して、作曲者と演奏者の『心』を聴き手に伝えることができると言っているのである。後半の『心へと至らんことを』は、聴き手の『心』を述べており、演奏者が様々な技巧を駆使して伝えようとした演奏から、聴き手の側では、その『心』にある様々な経験と相まって感動が生まれる。それには、演奏者と聴き手の両方に、音楽に対する『想像力』が必要であり、これを培うのが『情操教育』となるのである（ただし、ベートーヴェンのこの書き

込みは、断片的で、様々に解釈でき、一般的には、世界平和を願ったとされることが多いそうです。」ご興味のある方は、

<https://www.youtube.com/watch?v=wPXLUxkqEt8>をご覧ください。

この2つの「心」をそれぞれ、論文発信者（の「心」）、読み手（の「心」）に置き換えてもよいのではないのでしょうか。酒井氏の講演にある「作曲者→演奏者→聴き手」の流れは、「論文発信者→編集者→読み手」と置き換えることもできます。ただし、音楽の世界ではすでになされていると思いますが、我々の世界でもこの矢印を双方向的に対話させる試みをしない限り、学会誌、ひいては学問の発展も危うくなるように思います。

現在、このコロナ禍で、この心の交流、対話が断絶されつつあります。われわれ一人一人の英知によって、克服は難しくないと思いますが、いかがでしょうか。

昨年よりのこのコロナ禍の影響により、会員、投稿者の皆さまには、大変な時期が続いていると拝察いたします。今年度も編集委員一同、査読その他、以前にも増して、投稿者の皆さまに寄り添った体制でと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

（編集委員長・田中廣明）

★大会総務委員会プロシーディングス担当より

目下、大会総務委員会（プロシーディングス担当）では、2020年度第23回年次大会で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』（Proceedings）（第16号）（電子媒体のみの発行）を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、6月末頃に当学会ホームページ上に公開する予定です。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございます。

（竹田らら）

《事務局より》

★2020年度会計報告（案）

収入合計	3,419,633
------	-----------

年会費	2,912,000
一般	2,584,000
学生	300,000
団体	28,000
大会参加費	264,000
印税	35,530

収入小計	3,211,530
------	-----------

予備費（前年度繰越金）	208,103
-------------	---------

支出合計	1,991,115
------	-----------

大会論文集作成費	150,150
S/P 製作費	811,283
印刷費・郵送費	184,521
事務局諸費	151,789
人件費	33,500
文具費・会議費など	65,753
事務業務委託	47,916
手数料	4,620
学会システム開発	72,600
学会システム維持費・利用費	121,000
会員管理費	300,000
レンタルサーバ使用料	60,060
言語系学会連合会費	30,000
講師謝金・渡航費	45,000
オンライン大会準備費	64,712

次年度繰越金	1,428,518
--------	-----------

★大会会計報告

収入合計	264,000
------	---------

大会参加費	264,000
-------	---------

支出合計	218,956
------	---------

印刷費・郵送費	4,848
事務局諸費	104,396
人件費	33,500
文具費・会議費など	21,000
事務業務委託	47,916
手数料	1,980
講師謝金	45,000
オンライン大会準備費	64,712

収入合計-支出合計	+45,044
-----------	---------

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。学会財政の問題もあり、できれば7月末までにご納入いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行口座】

記号・番号：00900 - 130378

口座名：日本語用論学会

(他金融機関から)

支店番号：099 (店名：〇九九)

預金種目：当座預金

口座番号：0130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj-at-outreach.jp

★激甚災害被災会員の皆様の会費・大会参加費免除について

日本語用論学会では、激甚災害などで被災された会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2021 年度会費」ならびに「2021 年度年次大会の参加費」を免除しております。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

免除申請先（メール、郵送のいずれも可。ご連絡いただきましたら、手続きの詳細をご連絡いたします。）

日本語用論学会事務局

〒448-8542

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 北野浩章研究室内

E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

(事務局長・北野浩章)

★《新刊・近刊案内》★

- 『ポライトネスの語用論』ジェフリー・リーチ (著) 田中典子 (監訳)・熊野真理・斉藤早智子・鈴木卓・津留崎毅 (訳) 研究社 (定価 6,300 円＋税)

本書は、2014 年に刊行された *The Pragmatics of Politeness* の全訳である。リーチと言えば、*A Comprehensive Grammar of the English Language* など英文法書の著者として名高いが、語用論・ボラ

イトネス研究でも多くの業績を残している。本



書は、主要なポライトネス研究を概観するとともに、「謝罪」「依頼」「申し出」「感謝」「(不)同意」「助言」などの発話事象をコーパスのデータに基づいて考察。最終章(ポライトネスと英語史)では歴史語用論も取り扱っている。500 ページを超える大著であり、読み通すには時間がかかるかもしれないが、データ収集やリサーチ方法についても解説されていることから、語用論やポライトネスを研究する大学生・大学院生はもちろん、研究者にもぜひ手に取ってほしい 1 冊である。(2020.06.19 刊)

- 『認知言語学の大冒険』鍋島弘治朗 (著) 開拓社 (定価 3,740 円＋税)



本書は、研究者に焦点を絞った認知言語学の概説書である。語用論を含む認知言語学に関する論者であるレイコフ&ジョンソン、フィルモア、タルミン、ラネカー、フォコニー、ゴールドバーグを、バークレーにいた著者が語ると

いうユニークな展開となっている。メタファー論に関する多くの著書、編著を世に送り出してきた著者が、メタファー論はもとより、メトニミー、カテゴリー論、イメージ・スキーマ論、多義論、フレーム意味論、構文文法、虚構移動、力動理論、移動の類型論、捉え方、ベースとプロファイル、認知文法、スキーマとプロトタイプ、メンタルスペース、融合理論にまで手を広げ丁寧に解説するという贅沢で盛りだくさんな内容である。難易度としては研究者向けではあるが、その中でも読者に寄り添う視点として、メトニミーが理解できないという設定の AI ロボット、メトロン君という漫画がついており、理解を助けてくれる。刊行以来 SNS などでも多くの声が寄せられており、内容の充実ぶりが窺える。(2020.12.21 刊)

- 『発話の権利』定延利之 (編) ひつじ書房 (定価 2,900 円＋税)

ある種の発話は、特定の話者には発言する権利がある一方で、別の話者には権利がないことがある。これが本書の編者、定延利之氏の出発点

である。例えば、車が動かない時に「あ、ブレーキ踏んでる！」と言うことは車内にいる誰でも可能だが、「あ、ブレーキ踏んでた！」は運転手にしか言えない、という。もちろん、これに類する問題は（本書でも言及されているように）「情報のなわ張り」「ポライトネス」「わきまえ」などの従来の文法研究・語用論研究

においても一部扱われていた。本書の特徴は、「コミュニケーションの原理を追求する、コミュニケーション論のラインまで引く」（「あとがき」より）という方針のもと定延氏から呼びかけられた、霊長類学・人類学・会話分析など様々な分野の専門家が、「権利」についての根源的な論考を展開している点である。全 235 ページと比較的コンパクトで、装丁もご覧の通り楽しく、何度も手に取りたくなる体裁である一方、各章は濃厚である。いずれの章も興味深い具体事例の緻密な観察に基づいているため、各著者の論考も追いやすい。ページを繰るごとに、言葉とコミュニケーションについて新鮮な理解と発想を与えてくれる魅力的な一冊である。（2020.12.21 刊）

■『ナラティブ研究の可能性—語りが写し出す社会』秦かおり・村田和代（編）ひつじ書房（定価 3,600 円＋税）

本書はナラティブを研究することの意味と可能性を、多様なアプローチを用いた実証研究論文で示すことに挑戦している。全 3 部で構成されており、まず第 1 部は「国を超えた移住」として、在日外国人、技能実習生、在外日本人移民の問題を取り扱う。つづく第 2 部の「震災の経験」では、阪神淡路大震災について実際の体験ではない者の仮の語り（「もし～だったら」）の分析や、防災研究の観点から過去の震災体験を分析し未来に活かす試みを掲載している。さらに、東日本大震災の放射線に関する科学者の出張授業を分析対象とした論文では、自然科学の分野からのナラティブ研究に焦点を当てる。最後の第 3 部は「医療の現場」とし、ナラティブ・セラピーについて、また近年脚光を浴びてい



るナラティブ・ベイスド・メディシンを取り上げ、医療の場における対話を分析している。これらは全て、現在そしてこれから先も日本社会が内包する問題を明瞭にし、その根本となっている価値観や社会規範を批判的に読み解いた上で、問題の解決に導こうとするものである。「ナラティブ」をこれから研究したい多種多様な分野の研究者にお薦めする 1 冊である。（2020.12.25 刊）

■『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点：用法基盤モデルに基づく新展開』中山俊秀・大谷直輝（編）ひつじ書房（定価 4,500 円＋税）



本書は、文法や言語知識を徹底的に実際の言語使用の経験に根付いたものとして理解しようとする、用法基盤アプローチによる言語研究の理論と実践を提示した論文集である。「第 I 部・経験基盤の言語学のフレームワーク」「第 II 部・ケーススタディ〈理論研究編〉」「第 III 部・ケーススタディ〈個別研究編〉」の三部構成となっている。子供の言語獲得、文法の歴史的変化、新奇表現、タガログ語やアルタ語など、各章の分析対象や分析手法は極めて多岐に渡っているが、編者たちによる序文と冒頭の 2 章において、用法基盤アプローチの理論的特徴と意義が丁寧に論じられ、大局観が明確に示されているため、決して散漫な印象はない。むしろ、もっと様々なケーススタディが読みたい、いや自分もこのような潮流に一石を投じるような研究をしたい、という気持ちを掻き立ててくれる刺激的な一冊である。刊行記念の座談会の映像が配信されている点も特筆すべき展開であり、一冊の書籍だけでは収まりきらない編者・著者・出版社の熱意と研究コミュニティ発展の大きな可能性を感じさせてくれる。（2020.12.25 刊）

■『「させていただく」の語用論 一人はなぜ使いたくなるのか』椎名美智（著）ひつじ書房（定価 3,600 円＋税）

本書が研究対象とする「させていただく」という表現は、無意識のうちに多用する表現のひとつと言える。例えば、E メールを書くとき、複数回連続して使用してしまい、後でそのうちのいくつかを書き換えたり、本来であれば、相手の許可が関連する表現であるが、許可と無関係に



使ったりするという話も聞く。本書は、このように使用が拡大する「させていただく」を歴史社会語用論的アプローチにより、なぜ・どのように定着したのかを解明する書である。5章からなる本書は、第1章・第2章で丁寧な問題提起と先行研究のレビューが行われた後、続く第3章では、「させていただく」を含む様々な文の容認度調査結果、第4章では、異なる時代に収集された2つのコーパスデータを分析して明らかにされた「させていただく」の変化の特徴が示されている。第5章は、前2章の通時的・共時的研究結果を統合し、「させていただく」の使用動機や語用論的機能を明らかにしている。普段、何気なく使用する表現だが、なぜ多用するのか、どのようにして多用するに至ったのか、一使用者としては説明できないことが、学術的に解明される楽しさ・気持ちよさが伝わる一冊である。(2021.1.28刊)

■『日本語の乱れか変化か』

これまでの日本語、これからの日本語』

金澤裕之・川端元子・森篤嗣(編) ひつじ書房(定価 3,800円+税)



本書は「言葉は変化する」という前提の下で、様々な日本語の現象をネガティブな意味での逸脱・誤用と捉えるのではなく、タイトルにもあるような「これまでの日本語、これからの日本語」を考え、「日本語学の射程を広げる」目的のものである。「面白いと思う言語現象を、極めて真面目に分析する」という視点を共通点とする12本の論文が、4章に分類されて収められている。第1章では文法や音声の逸脱に関する論文、第2章では歌詞や作文、商品名をデータとし、逸脱表現や新しい表現に関する論文、第3章では新語・外来語・慣用的表現における逸脱や変化に関する論文、第4章では教育や社会の観点から逸脱について論じる論文が、各章に3本ずつ収められた充実した論集である。日本語のありのままが緻密に記述されているため、日本語に興味を持つ読者だけでなく、日本語

と共に日常を過ごす読者も楽しめる一冊である。(2021.2.26刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■まだまだコロナが収まらない日々が続いてありますが、そんな中でも研究大会や研究会、授業に会議に、オンラインを用いて多様な試みがなされています。オンラインならではの環境を活かした国際的な交流も盛んになり、また「みんながIT巧者」のようになったのは思わぬ産物だったかも知れません。しかし年上の研究者の方にZoomの切り際、両手でバイバイするのは今一つの躊躇いと気恥ずかしさを禁じ得ない今日の頃です。(秦かおり)

■コロナ禍が続き、ある意味でこの生活に慣れてきたところもありますが、もうこれまでのような状況には戻らないと思えば寂しくもあり、一方ではオンライン化は諸々便利ですごく助かるという新しい感覚もあり、複雑な気持ちになります。これからも変化する状況を受け入れながら戸惑いながら、新しい経験を重ねて邁進したいです。(野村佑子)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第45号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2021年5月30日

[広報委員会]

\* 委員長：秦かおり

\* Newsletter 編集担当：野村佑子

\* 公式ホームページ担当：横森大輔

\* 会員メーリングリスト担当：八木橋宏勇

E-mail: [webmaster-at-pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster-at-pragmatics.gr.jp)